

囲碁にまつわる言葉 【長考】

碁の大会では対局時計を使い、大会を円滑に進めようとしています。時計のお陰で高段者同士でも大概は一局一時間くらいで終わります。アマチュアが対局で【長考】するのは次のような状態の時です。

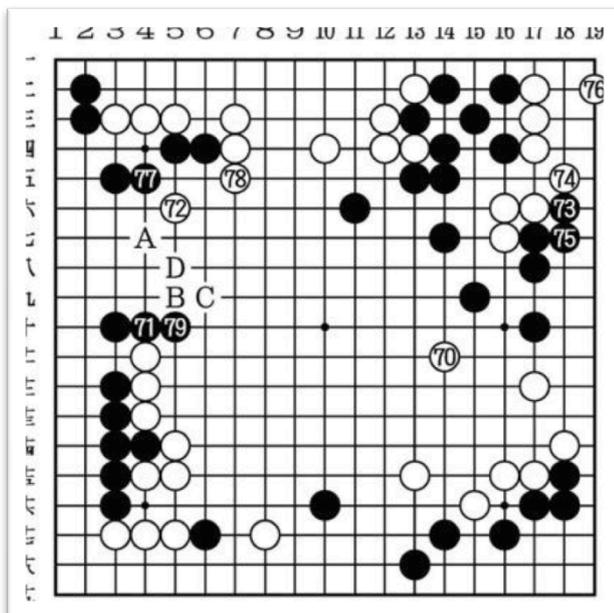
1. 局面で次の一手がわからない時
2. 次の一手でそのあとの展開が全く異なるため迷っている時
3. 有利になりそうになり、読み切ろうとしている時
4. 不利を意識し対応に苦慮している時

1の場合は、良い手を打つのはあまり期待できません。2~4も同様で、着手そのものは平凡なことになりがちです。素晴らしい手は、瞬間的か短時間で閃く傾向があります。棋士は、素晴らしい手を見つけようとして長考するのではなく、遠い将来を考えているかららしいです。

---- 【長考】 ----

最善手を探すために、できるだけ多くの選択肢を考慮する姿が長考です。「長考に耽る」「長考に沈む」などの姿です。思考型のゲームにおいては、ゲームの目的に適った行為です。トランプや麻雀ではこのようなことはありません。麻雀でのツモった牌を切るか、鳴くかの判断は長考にはなりません。

「長考」とは「読み」とも呼ばれ、何手や何十手先の着手を考える行為です。どのような選択肢によって、どのような結果になるかを考える行為です。名人による長考がときに伝説となることがあります。囲碁の最も長い大長考では時間無制限では山梨県出身の星野紀九段の16時間、1988年の持時間制では本因坊戦挑戦手合で大竹英雄九段



を相手に、武宮正樹九段が5時間7分の長考をしています。

「長考に耽る」のは、事前に相手の出方を予想できていなかったためともいえる姿ともいえます。「長考」は実際には、迷いに費やす時間のほうが圧倒的に多いといわれます。この場合は、「長考」は窮余の策に過ぎず、けっして胸を張れる行為ではありません。慣用句に「下手の考え、休むに似たり」と揶揄する言い方もあります。時間を浪費するだけで、なんの効果もなく、相手が考え続けることあざける言い方です。将棋界には「長考に好手なし」という格言があるそうです。羽生善治十九世名人は「長考に入るのは迷っている場合が多いため」と語っています。

長考は故意に遅らせて相手に嫌がらせしているわけではなく、最善手を模索するためにできるだけ多くの選択肢を考慮するのです。思考型のゲームにおいてこのことはある意味でゲームの本来の目的に適った行為ともいえます。名人による長考が時に伝説となる所以です。アマチュアの囲碁大会とか定例会などでは、頻繁に長考をするのは相手に不快感を与えます。時間切れもあります。

(2023年5月15日 大和田囲碁同好会 成田 滋)